寄稿

釈尊と親鸞聖人にみる非暴力と慈しみ

鍋島直樹（龍谷大学文学部教授）

戦争によって同じ人間が悲惨な目に遭っている現実に、世界が胸を痛めている。原点に返り、釈尊と親鸞聖人は暴力に対してどう説かれているだろうか。

釈尊における非暴力と慈しみ

釈尊は非暴力と慈悲の姿勢を説き続けた。釈尊自身の晩年77歳の頃に故郷の釈迦国とコーサラ国との間で武力衝突があった。釈迦国は滅ぼされた。戦乱の中で、釈尊は変わらずにこう説き続けた。

《すべてのものは暴力に怯える。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。生きとし生けるものは幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せを求めていても、死後には幸せが得られない。（『ダンマパダ』130・131偈）》

《実にこの世においては、怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。（『ダンマパダ』5偈）》

暴力は自他ともに悲しみをもたらす。報復して殺し合ってはならない。非暴力と慈悲の姿勢を持とうと釈尊は教えている。

釈尊の言葉は過去の物語ではない。第2次世界大戦後、日本の戦争責任を問うため、サンフランシスコ講和会議が1951年9月に開かれた。世界各国が対日賠償権請求を議論した。セイロン代表のジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ蔵相がこう演説した。

「憎悪は憎悪によってぬぐい去ることはできない、ただ慈愛によってのみ消え去る」

ジャヤワルダナ代表は、『ダンマパダ』にある釈尊の言葉を引用して、対日賠償権請求を全て放棄すると宣言した。ジャヤワルダナ代表の発言に各国の代表が共鳴して、対日賠償権請求をあえて求めずに、日本を国際社会の一員として復帰できるようにした。終戦後、日本の経済発展があったのは、こうしたアジアの国々の憎しみを超えた温情があったからである。

親鸞聖人における非暴力と慈しみ

親鸞聖人にも、迫害を受けた時の言葉が遺されている。

（1）親鸞聖人は、弾圧者を迷えるものとして厳しく批判した。

親鸞聖人は「自分の心にまかせてふるまっていいというのは、間違いである。悪きことをすて、自他を悲しませてはいけない。善導大師が教えたように悪を好む人をつつしんで遠ざかれ」（『末灯鈔』一六通）と説いた。

（2）しかし、親鸞聖人は、弾圧者を慈しむ心を持てと教えた。

「念仏者は、自分たちを妨害するような人にもあわれみの心をもち、迫害者をあわれみ、念仏を心から称え、妨害する人を助けてあげてくださいと、善導大師は言われた」（『御消息集』九）と、親鸞聖人は説かれた。

さらに親鸞聖人は、罪なき念仏者を殺した権力者が後に流罪になった事実を踏まえ、こう記した。

「承元元（1207）年に、後鳥羽上皇や土御門上皇らが専修念仏を停止し、罪なき念仏者を死罪に処したが、それから14年後の承久の乱（1221年）では、鎌倉幕府が、討幕しようとした後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に配流することとなったのであるから、こうした現実を知って、念仏を深く信じて、世の平安を心からいのり、念仏を申してください」（『御消息集』七）

怨親平等の姿勢

「怨親平等」という教えがある。敵も味方も同じ平等な人間であるという意味である。

親鸞聖人は、『教行証文類』の「化身土巻」に、こう記している。

「怨親しばしば知識たり。知識しばしば怨親たりと。…含気を己親に等しとす」

知識は先生を意味する。敵も味方も自分にとっての先生であるという。「含気を己親に等しとす」とは、「含気」、すなわち、生きとし生けるものを自分の肉親のように愛することを意味する。

このように親鸞聖人は、悪を好む人から遠ざかり、願われたいのちを大切にして、敵対せずに生き延びて愛し合うことを教えた。不条理なこの世界であるからこそ、念仏して「世のなか安穏なれ」と願い続けた。

暴力を抑えて、慈しみあおう

ニューヨーク国連本部広場に、「彼らは剣を打ち直して鋤として、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。イザヤ」と記されている。日本の平和の鐘も国連本部に寄贈され、彼岸に鐘が鳴る。戦時中、寺院の鐘を武器製造のために拠出したことを反省したからである。日本が二度と戦争をしないと誓った証しである。

広島平和記念公園の平和の鐘には『無量寿経』重誓偈がサンスクリット語で刻まれている。「我至成仏道　名声超十方　究竟靡所聞　誓不成正覚」「神力演大光　普照無際土　消除三垢冥　広済衆厄難」と。「われ仏の道さとりえば　その名は十方に聞こえなん　もし至らざるくまあれば　誓いてさとりをえざらまし」

「不思議の力かがやきて　あまねく闇の世を照らす　欲といかりと愚かさの　わざわい永遠に除かなん」という意である。

仏の慈しみの光に照らされて、自らの傲慢さを慚愧し、対話して認め合い、支え合って平和な世界を築くことが人の道である。

怨みと憎しみを超えていく道はどこにあるのだろうか。

怨みに怨みを返さない。憎しみは憎しみによってやむことはなく、ただ慈しみによって消え去る。慈しみとは、衝撃を跳ね返したり、それによって壊されたりするものではなく、悲しみも怒りも無念さも全てを包み込む。愛しさや慈しみは、何ものにも侵されることのない強い心である。

一人一人が慈しみをもって平和を誓うことが、やがて家族、学校、国、世界への平和につながっていく。それだけではない。自他の平和を願うことは、どのような死別を迎えても、大いなる慈しみに包まれて、必ずほほ笑んで浄土で再会できる道を開く。

戦争やテロで愛する人を突然に亡くした無念さ、悔しさ、悲しみは消えるものではない。だからこそ、悲しみを忘れず、戦争やテロが二度と繰り返されないように願ってやまない。

ロシアによるウクライナ侵攻を受け、世界平和とインド国民の安全な帰還を祈るプラカードを持つ人々＝2022年2月25日、インド中部ボーパール（SOPA Images/LightRocket / ゲッティイメージズ）

鍋島直樹（なべしま・なおき）龍谷大学文学部教授、文学博士